

建築家の闇を主題とした言説にみるモダニズムの光を超越する思考

A Study on Architects' Discourse on Overcoming the Light of Modernism through the Concept of Darkness

奥山研究室 21M50203 櫻井千尋 (SAKURAI, Chihiro)

1. 序 光と闇は、建築において古来より人間の想像力や文化を含めた根源的テーマであるといえる。近代主義建築では光が主要なテーマであったが、現代では闇を含めた多様な議論が展開され、その一因として、光に対する闇を日本の美意識として描いた谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』が多くの建築家に影響を与えてきたことが挙げられる¹⁾。磯崎新はこれを引用した上で、闇を根底とする日本独自の空間感覚について現象学的な観点から考察している²⁾。また、白井晟一は「闇のない光はない」と述べ、二項対立的な視点を排除した光と闇の存在論に言及している³⁾。このように闇は建築家にとって、光に重きを置いたモダニズム的思考の枠組みを乗り越えて建築を考える上で重要な題材であると考えられる。そこで本研究では、現代日本の建築家の闇を主題とした言説を資料とし、その内容を検討することで、モダニズムの光を超越する建築家の思考の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 闇に対する認識 本章では、資料とした言説⁴⁾から、建築家がいかなる観点から闇を論じているかを検討する。例えば図1に示した言説においては、「湿潤な空気の充満する日本的空間の特質」という記述から建築家が闇を日本的空間を象徴するものとして論じていることが読み取れる。このように、闇の特性やはたらきを、闇の認識として抽出・検討する。また、「沁みこむ陰翳(シェーディング)がより色濃くなった究極」といった記述からは、建築家による闇の物理的な性質への着目が読み取れる。これを着目性質として闇の認識と合わせて検討する。

2-1. 闇の認識 資料から抽出した闇の認識の意味内容を、KJ法⁵⁾を用いて相互に比較・検討し、『意味論的認識』、『体験論的認識』、『構成論的認識』(以下、『意

味』、『体験』、『構成』とする)の大枠で整理した(図2)。以下、その内容を説明する。

『意味』は闇の象徴作用について思考するもので、「生命感・死を想起する」などといった、闇そのものにまつわる〈自律的なイメージ〉を考えるもの、「古民家的な空間」といった闇によって〈建築空間に付与されるイメージ〉を考えるもの、「白や黒は光と闇のように抽象的である」といった、闇と関連する〈色彩にまつわるイメージ〉を考えるものから捉えた。

『体験』は闇がもたらす人間の知覚体験を思考するもので、視覚が制限されることによる聴覚や嗅覚といった五感への〈知覚的作用〉や、その影響として「記憶を呼び起こす」といった〈精神的作用〉を考えるもの、「空間の様相をまったく変える」といった〈空間の現象的性質〉を考えるものが多くみられた。その他に、闇によって建築空間の〈物質性〉や〈非日常性〉が高められることに着目するものなどがみられた。

『構成』は建築の実体の中で表出する闇を思考するもので、ゴシック教会建築といった建築形式や図と地の関係における「地」としての闇といった、建築の〈部分・全体の関係〉に着目するもの、外部における夜の闇に対して建築を顕在化させるといった〈内部と外部の対比・相関〉に着目するもの、空間の広がりや平面性といった〈奥行き〉に着目するものから捉えた。

2-2. 闇の着目性質 次に、闇の着目性質を検討した。その多くは「内部には闇が広がり…」などといった、空間のような広がりや奥行きをもったものとして闇を記述するものであったが、「それはあの荒っぽいベトン・ブリュットそのままの肌なのだが…」といった、物質の表面

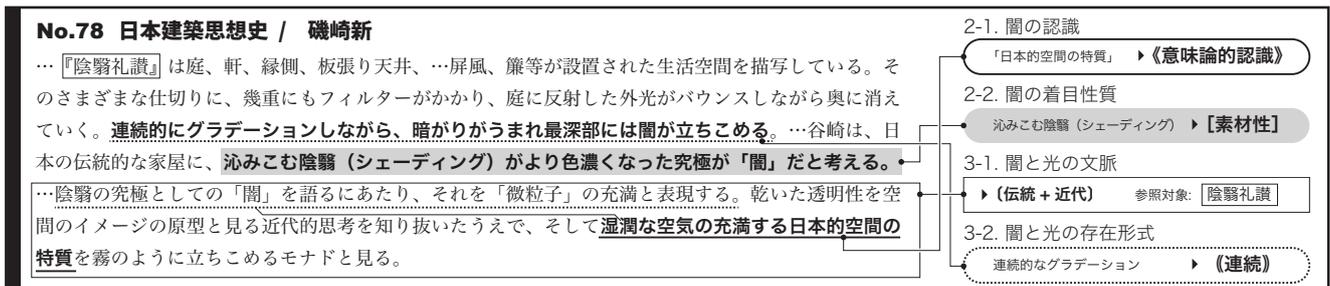


図1. 分析例

に付着した色彩や肌理のようなものとして闇を記述しているものも少数ながらみられた。そこで、前者のような闇の空間的な性質に着目するものを「空間性」、後者の表面に生じる闇に着目するものを「素材性」とした(図3)。

これらの着目性質と前節で検討した闇の認識との資料単位ごとの対応関係を検討した結果、《意味・体験》と《構成》では「空間性」が大半を占めたのに対し、《体験》と《体験・構成》では「素材性」との対応が比較的多くみられた。これより、闇は空間という非物質的なものとして思考される傾向が強いが、手で触れたり目で見たりする知覚体験における闇の特性を思考する場合は、例えば「…そこに観念でなくむしろ物質の手触りを見る」といったように、表面の凹凸や肌理にあらわれる物質的なものとしても論じられることがわかった。

3. 闇と光の文脈と存在形式 本章では、建築家が闇を論じる上で参照される文脈を検討する。例えば図1に示した言説では、「乾いた透明性」という近代的空間

のイメージに対峙するものとして、「湿潤な空気の充満する…」という伝統的な闇の空間イメージが論じられている。このように、建築家が闇と光を通して主張・批評する上での建築的な枠組みを闇と光の文脈として抽出し、検討する。それに加えて、資料からは闇とその対立概念である光との関係性を読み取ることができる。例えば「連続的にグラデーションしながら、暗がりやがうまれ最深部には闇が立ちこめる」という記述からは、闇と光が同時に存在して連続的に移り変わる関係性を読み取ることができる。このような闇と光との関係性を闇と光の存在形式として抽出し、検討する。

3-1. 闇と光の文脈と参照対象 闇と光の文脈については、その大半が建築の歴史との関連を示すものであり、日本の伝統や西欧古典主義を「伝統」、近代主義やモダニズムを「近代」、双方への関連がみられるものを「伝統+近代」とした(図5)。その他には、個人の設計論や特定の作家、都市・環境への視点から論を展

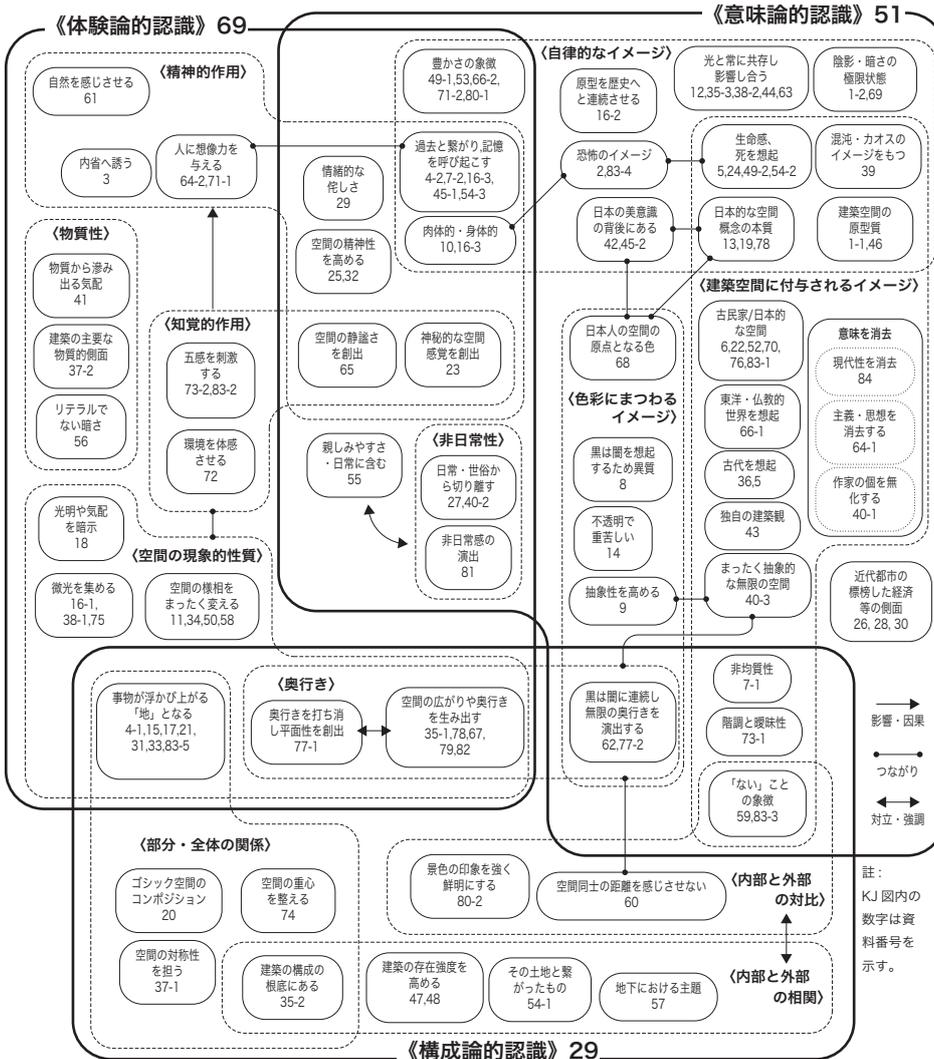


図2. 闇の認識の意味内容 (KJ図)

[空間性]	3次元空間内に組織された、広がりや興行きのある性質
	No.37 大阪府立近つ飛鳥博物館 / 安藤忠雄 …この巨大な階段の下部に収められた博物館内部には闇が広がり、古墳の中に納められているのと同様の姿で展示されている出土品を前にして、人びとは実際の古墳の世界に入ったような感覚を体験できる。
[素材性]	表面に付着した物質性、色彩や肌理として現れる性質
	No.10 海のエロス / 磯崎新 …それはあの荒っぽいベトン・ブリュットそのままの肌なのだが、…この不透明な物質は、二十年の間にいくつもの視覚言語をうみながら、トゥーレットの僧院の深部において、深海のような闇の部分となって現われている。
	なし 7

註: 0内は空間性と素材性両方に関する記述がみられた資料数。

図3. 闇の着目性質

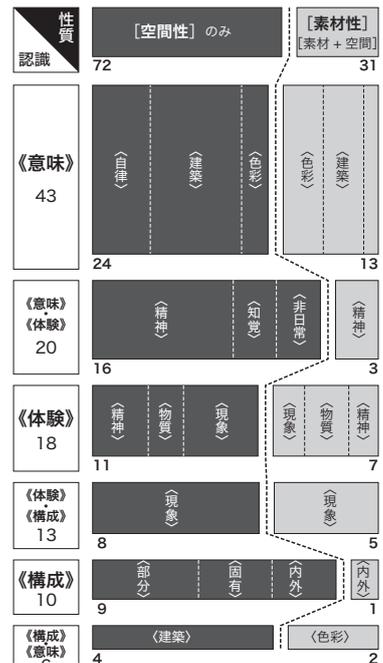


図4. 闇の認識と着目性質の関係

開するものなどがみられた。

さらに、「ル・トロネ修道院」や「陰翳礼讃」などの闇に関連する建築・著作や、「ファンズワース邸」といった闇に対する光に関連する建築などの具体的な参照を伴うものがある。これらを闇と光の参照対象として抽出・検討し、【建築】、【建築家】、【自然】、【文化・思潮】の4つに分類した(図6)。歴史的な文脈との対応関係を検討した結果(図6右側)、「伝統+近代」においては【文化・思潮】が比較的多くみられた。このことは、伝統や近代を個別に問題とする場合は、個々の建築や建築家の作品における闇や光を参照することが多い一方で、伝統と近代を同時に扱うものは、個別の建築だけでなく、時代の差異を闇と光にまつわる社会的思潮の遷移として論じることで、自身の建築論を社会の中に位置づけようとする建築家の思考を示すものと考えられる。

3-2. 闇と光の存在形式 次に、資料から抽出した闇と光の存在形式を検討し、「(連続)」と「(対立)」から捉えた(図7)。「(連続)」は闇と光を連続的な関係として捉えるもので、闇と光を時間的な移行の中に捉えるもの、モノに生じる光と陰に着目するものなどがみられた。「(対立)」は闇と光を二元的に対置して捉えるもので、闇と光を相反する関係と捉えるものや、闇と光を独立して捉えるものなどがみられた。さらに、2章で検討した着目性質との対応関係を検討した(図7右側)。その結果、「(対立)」では「空間性」が、「(連続)」では「素材性」が多くみられた。これより、対立関係においては闇と光の抽象性が高められることから空間的な概念としての闇を捉えやすく、階調の中においては多義的な表情や物質的な手触りとして闇を捉えやすいという建築家の傾向を見出した。

4. 闇を通してモダニズムの光を超克する思考

闇を主題とした建築家の思考について、3章で捉えた歴史的な文脈および闇と光の存在形式の対応の中に、2章で捉えた闇の認識との関係を示したものが図8である。その結果、「伝統」においては「(対立)」と「(連続)」は同程度であったが、「伝統+近代」では「(連続)」が、「近代」では「(対立)」が多くみられた。このことから、連続的な闇と光の在り方は近代以前の建築に見出される傾向にあり、特に近代との比較においてより強く注目されることを見出した。闇の認識の内訳をみると、「伝統」と「(連続)」、「近代」と「(対立)」において《意味》が高い割合を占めた。前者においては「素材性」への着目が多くみられ、「『空間の暗さ』と『表面の黒さ』が、何重にも入れ子になって、日本の

歴史的な文脈 90			その他の文脈 20	
(伝統) 38	(伝統+近代) 26	(近代) 26	歴史的な文脈を含まないもの	
日本の伝統 (34) 西欧古典主義建築 (4)	モダニズムと日本の伝統双方との関連が読み取れるもの	近代主義・モダニズムとの関連が読み取れるもの	個人な文脈 (11) 環境的文脈 (9)	
27	11	20	6	21
参照対象あり		73 ⁽¹⁹⁾ 光の参照対象あり	なし	
		37		

図5. 闇と光の文脈および参照対象の有無

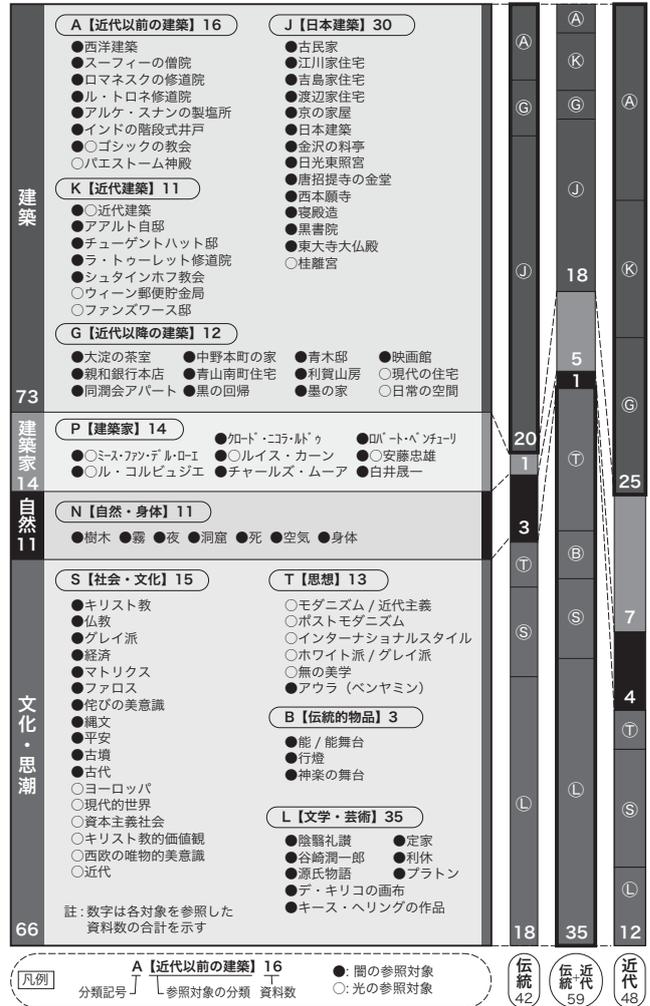


図6. 参照対象の分類、歴史的な文脈との関連

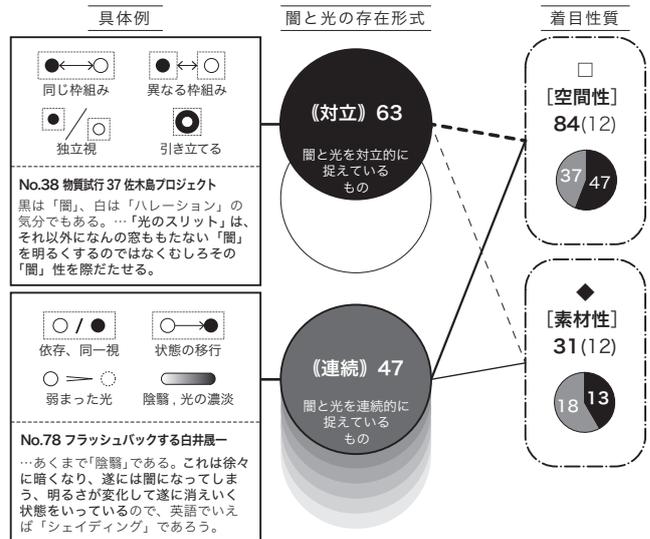


図7. 闇と光の存在形式と着目性質の関係

陰影の美はつくられている」というような、日本建築の特徴を空間と表層の双方における闇と位置づけ、そこにみられる陰影の連続で生じる闇に象徴を見出すものなどがみられた。後者では「素材性」への着目はほとんどみられず、「逆にミースのファンズワース邸のように…外光がまんべんなく空間全体に一樣に漂うものは、光の象徴効果は最も希薄となる」といったように、モダニズムの空間における光との対比として闇の象徴作用を思考するものなどがみられた。このことは、闇の意味を思考する上で、近代以前の建築で物質的性格に見出される闇と光が連続する様相に着目するもの、近代の空間にみられる光の対概念として着目するものという建築家の対比的な傾向を示すものと考えられる。

〔伝統+近代〕の文脈においては、《意味》だけでなく《体験》および《意味・体験》も比較的多くみられた。例えば「近代建築が空間を均質化したのに対して、…この光と闇の織りなす綾が、日本建築の伝統的な空間がもっていた闇をわれわれの記憶に呼び起こす。」といったように、伝統と近代との比較の中で闇を論じるものが多い。これは、

近代で捨象された空間の多義性を、伝統的な建築において知覚体験として見出される闇と光の連続的な関係に志向する建築家の思考を示すものと考えられる。

5. 結 以上、建築家の闇を主題とした言説を対象に、闇に対する認識とその文脈、および光の存在形式を検討した。その結果、近代主義の標榜した均質空間における光の在り方との対比において闇を思考することや、近代以前の建築に見出される多様な闇と光の物質的性格から闇の意味を思考するもの、および伝統的空間に知覚される現象としての闇を手がかりにすることで近代を相対化するものという闇を通じた建築的思考の特徴的な内容を見出した。ここでは、意味論的な水準におけるモダニズムの光の相対化と、体験的視点に基づく伝統的な空間の再解釈という、日本的な脱近代の思考があらわれたものと考えられる。

註 1) 谷崎潤一郎：『陰翳礼讃』（創元社、1939）
 2) 磯崎新：『闇の空間』、『建築文化』No.211（彰国社、1964.5）
 3) 白井晟一：『建築と書』、『くりま』創刊号（文藝春秋、1980.7）
 4) ここでは、日本国内で発表された現代の建築家による言説のうち、闇という言葉が重要なものとして明確に語られているものを資料としている。国立国会図書館等の検索及び1945年以降の『新建築』『住宅特集』『建築文化』から収集した84資料（書籍22資料、雑誌62資料）、全110資料単位から分析を行っている。
 5) 川喜田二部：『発想法』（中央公論社、1967）内でのKJ法を用いている。

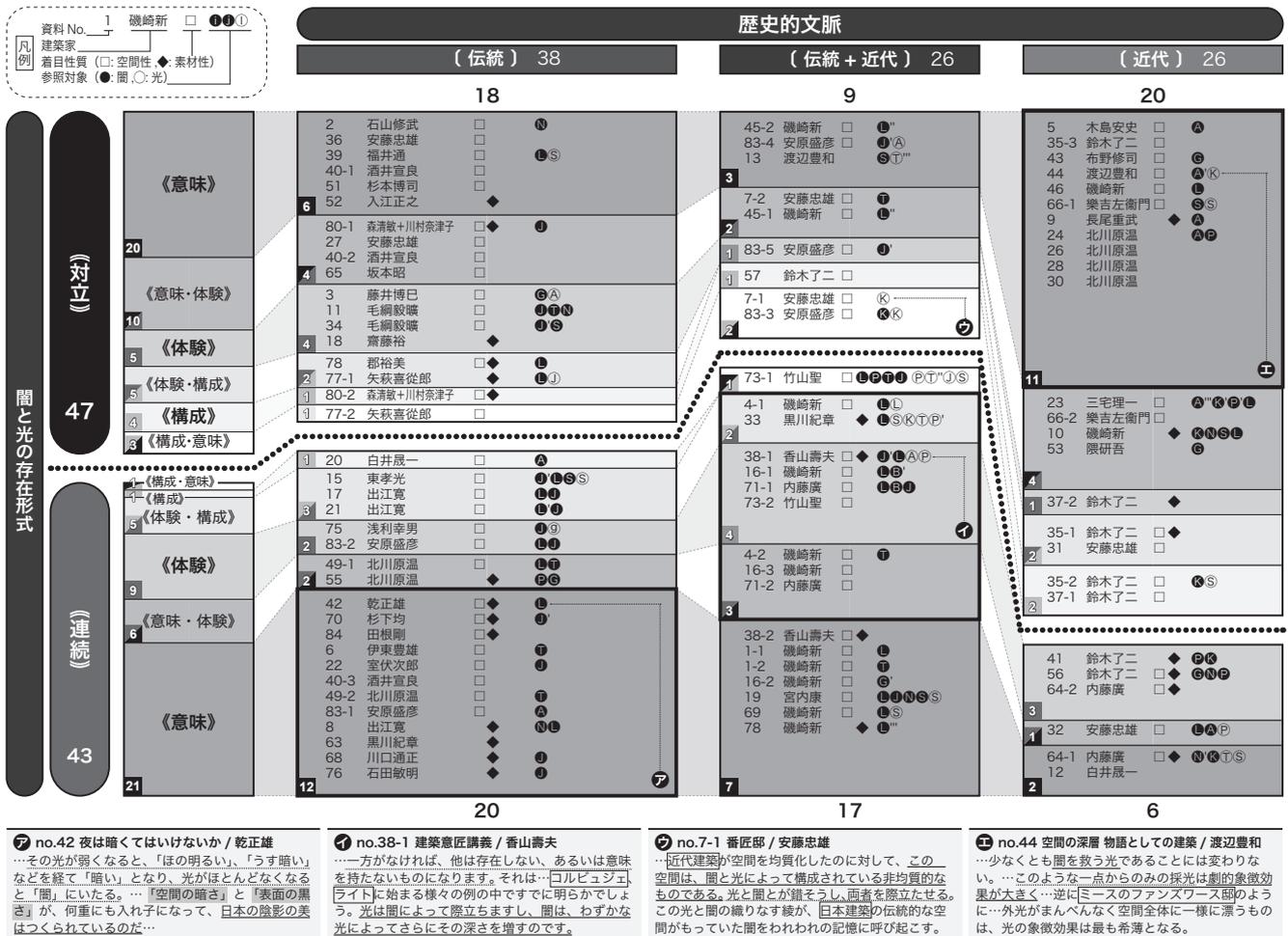


図8. 闇と光の存在形式および闇の認識の文脈ごとの対応関係